

## 道路交通と現代世相

星 埜 和\*

### Selected Issues In Contemporary Traffic Policy

Kano HOSHINO \*

冷えこむ冬の朝、バス停で待ちくたびれる長い人の列。定刻よりかなり遅れて一台到着。最後の一人が乗り終って発車の時には、後続の空いたバスが2台も並んでいる、といった光景は別に珍しいことでない。ラッシュ時に自然の流れに任せるかぎり、ダンゴ運転に陥るのは避けがたいであろう。10年以上も前から起こっている事態がまだ解消できないのは、当局の怠慢だといわれても仕方があるまい。一部でバスの専用や優先の車線指定が行なわれ、外国ではバス・ロケーション・システムの実験も試みられているが、このままでは民衆のバス離れが進むばかりだろう。身障者、乳母車、買物客に対するサービス改善とか、低床化、低公害化、ミニ・バス化などの提案に対しても真剣な取り組み方をすべきではないか。

戦後の教育改革で好ましい成果の上昇した面もあるが、もっとも基本的な点で重大な欠落があったのではないか。車の窓から眺めたり歩きながら見まわすと、たばこの吸いがら、マッチのもえさし、紙くず、ビニールの袋、空かんの類まで、ところかまわず投げ捨てられていて、汚なさはあきれかえるばかりである。吸いがら入れやごみ箱が手の届く所にあっても変りがない。バス停付近がとくにひどいのは、待ちくたびれてのイライラが影響しているのかも知れない。

道路なり公共空間をゴミ捨て場と区別できない人種は、ごく一部に過ぎないのかも知れない。注意して観察すると一人でつきつきといくつも投げ捨てる人を見かける。少数の不心得者のため多額の清掃費を払っているとすると、軽犯罪法で取締るとかどしどし罰金を取るとか手の打ちようがあるのではないか。アメリカのある州では、投げ捨て禁止罰金25ドルの制札を見たことがある。

車両通行の原則はできるかぎり左寄りの外側車線を守り、右側車線は追越しのため明けておくべきとされ、とくに大型車が守るべき原則と了解される。近頃一部の道路区間で環境保護の名目で貨物車に内寄り車線の通行が指定されている。そのためか指定のない区間でも大型車が内寄り車線を堂々と走っており、その左側を追越して行く車が目に付く。原則を破るような施策が望ましいかどうか。トラック、バスを含めて大型車は排ガス、騒音、振動など環境への影響が大きく、過積載による路面の損傷増大とあわせて、抜本的な対策の樹立を急ぐべきだろう。

道路交通による沿道の環境汚染の対策は試行錯誤を重ねながらも少しずつは前進しているが、見通しは明るいといえない。固定発生源と移動発生源を合すると莫大な量的气体、液体・固体の廃棄物や熱・音・振動の有害エネルギーが放出されている。行政側の対応もやや柔軟性を加え、石油危機も重なって、住民パワーもいく分下火にはなっているが、なお官公庁の縦割り制度の弊害や住民側のエゴやゴネ得についてあまり改まった兆しは見えていない。

限りなく灰色の世相のなかで、ちょっと明るい話題は、交通事故による年間の死者数（警察庁統計）が昭和33年来18年ぶりに1万人の大台を割ったことであろう。事故の減少傾向は昭和45年に死者数16,765人の記録を頂点として、その後年々低下し、とくに石油危機のあとで目立った減少を示した。減少の理由は十分研究に値するが、道路利用者、車両、施設、環境のあらゆる面で払われた努力の総合効果によるものであろう。事故の低減に伴い、比較的少数者かも知れない事故多発傾向者に対する調査と対策が大きく前面に浮び上がってくることになるだろう。

\*中央大学教授（交通工学） Professor, Chuo Univ.